

アジアの文字のはなし

—インド系文字の旅—

町田和彦 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授

文字の歴史

人類の歴史は、地球上の生物が誕生以来たどった気の遠くなるような長い時間の中では、一瞬のまばたきほどの長さしかありません。そして、文字の歴史はその人類の歴史の中でもごくごく最近のたかだか数千年の物語です。しかし、この決して長いとはいえない時間の間に、文字は生きもののように世界の各地で生まれ、あるものは栄え、あるものは滅んでいきました。栄えたものもやがて姿を変え、分かれ、さらに新しい興亡の歴史を繰り返しながら現代に至っています。

多彩な文字の宝庫アジア

こうした文字の歴史が織り上げたあてやかなモザイク模様を、現在、この目で見ることができ、また肌で感じるができるのは唯一アジアです。そしてその現場は、

風化した遺跡の中ではなく、人が絶え間なく行き交う喧騒の街中です。現在アジアほど多種多様な文字が生き生きと共存している地域は、地球上ほかにありません。

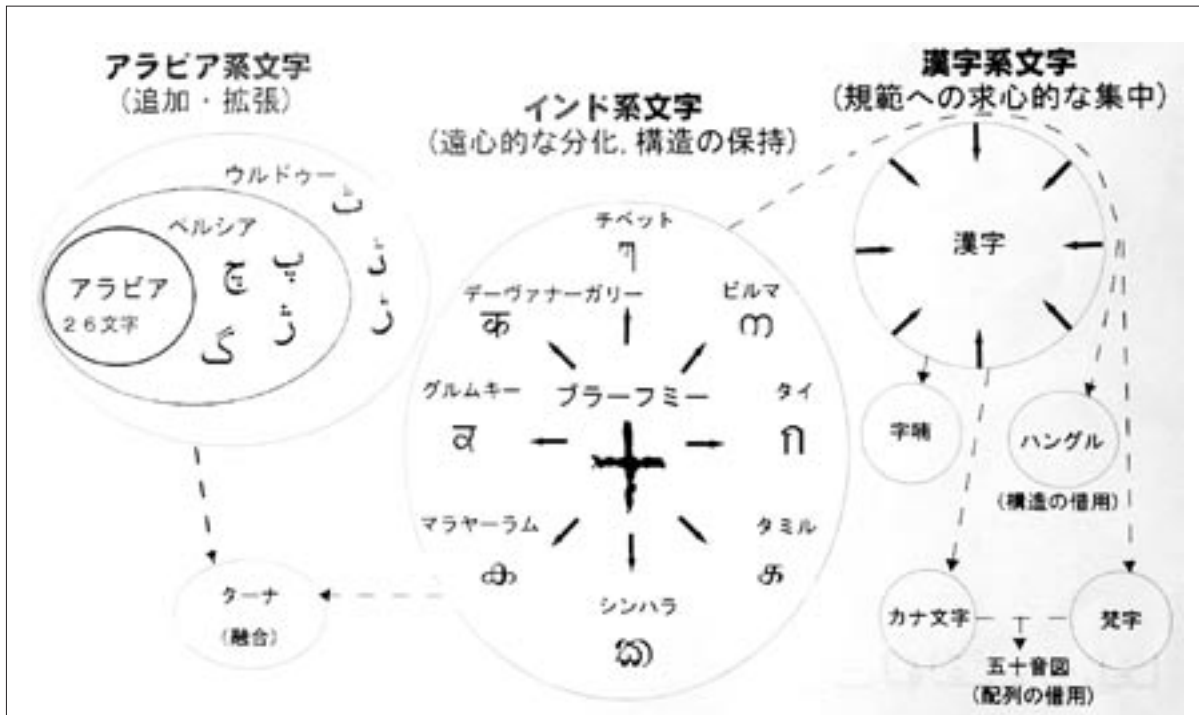
まず身近な東アジアを例にすると、漢字、ハングル、かな文字がすぐ思い浮かびます。東南アジアでは、不思議な形をしたタイ文字、ビルマ文字、クメール文字、ラオ文字などが、各国の空港に着くとすぐに目にとびこんできます。南アジアのインドでは、1枚の紙幣に17の言語でそれぞれ固有の文字でその値が印刷されています。さらに西アジアに目をやれば、アラビア文字やペルシャ文字と呼ばれる右から左に向かって書かれる文字の仲間たちがひかえています。

これらアジア固有の文字に、モンゴルのキリル文字、ベトナム、フィリピン、インドネシアなどで使用されているラテン文字（ローマ字）を加えれば、現在地球上で使われているほとんどすべての文字がアジアに揃っています。

文字文化圏

一見互いに関係のないように見えるアジアの多種多様な文字も、その歴史的な系統を調べていくと、共通の祖先にさかのぼれる文字のグループにまとめることができます。このような系統を同じくする文字のグループが占める空間の広がりや、文字文化圏ということばで説明することができます。文字文化圏という空間の切り分けは、国境や宗教、民族、言語、政治体制などによる境界線では必ずしも見えてこない人間の歴史や文化の特質を浮き上がらせてくれます。

アジアの文字文化圏は、東から西に向かって、漢字文化圏、インド系文字文化圏、アラビア系文字文化圏に大別されます。私たちになじみの深い漢字文化圏には、約14億の人々が生活をしています。ほぼ同数の人口を有するインド系文字文化圏は、東南アジアから南アジアをおおうように



(図1) 各文字系の規範と変容

ひろがっています。さらにアラビア系文字文化圏は、西アジアを中心に中央アジアさらに遠くアフリカにいたる地域までのびています。ここでは、日本人にはあまりなじみのないインド系文字の紹介をいたしましょう。(参照図1 <http://www.aa.tufs.ac.jp/i-moji/what/kihan.html>)

インド系文字のルーツ

話は、今から約2300年前にさかのぼります。マウルヤ王朝第3代のアショーカ王によって南アジア史上初めての統一国家が成立した時期です。その版図は、現在のインドに匹敵するかそれ以上でした。アショーカ王は勅令によって、この広大な地域の各地の石柱や摩崖に文字を刻ませました。これらの碑文は紀元前3世紀の中頃に集中していて、その内容は新生統一国家の施政方針ともいうべき王の決意が表明されています。仏教の精神が色濃くあらわれているのは、統一をなしとげるまでに流された多くの血に思いをはせた王が仏教に帰依した結果とされています。これらの大部分の碑文に刻まれている文字は今日ブラーフミー文字と呼ばれています。そしてこの文字こそが、現在のすべてのインド系文字の祖先です。(参照 <http://www.aa.tufs.ac.jp/i-moji/nakama/keizu2.html>)

ブラーフミー文字が、いつ、どこで、どのように成立したのかについては、いまだに謎につつまれています。断片的な事実を羅列すると以下ようになります。



道端で売られている新聞

- 1) 当時のインドは、東西交渉史でも明らかなように、実用上いろいろな文字の知識をもちえる状況にあった。
- 2) ブラーフミー文字のごく一部の字形が他の古代文字に似ている。たとえば、aをあらわす文字 λ は、フェニキア文字の λ (後のラテン文字Aのもととなった)と左右対称である。
- 3) ブラーフミー文字は、アショーカ王の碑文以前に使われた形跡がない。その約半世紀前、紀元前302年にマウリア王朝の首都にセレウコス朝大使として滞在したギリシャ人メガステネスは自身の『インド見聞録』に、「インド固有の文字はない」と記した。
- 4) ブラーフミー文字は最初から文字体系として完成されていて、最大の特徴である音節文字の構造は現代のインド系文字にいたるまで本質的に変化がまったくない。

まったく突如として歴史の表にあらわれたこの文字に関して、広範囲な地域にわたって一斉に使用されたという量的側面、あまりの完成度の高さという質的側面を同時に説明するのは困難です。国家統一を機にアショーカ王が、当時通用していた諸文字の知識をもとに独自の文字を短期間で考案させたという仮説もありうると思います。

インド系文字と漢字

ブラーフミー文字に遅れること約30年、同じ紀元前3世紀にアジアのもう一つの有力文字、漢字が同じような役割で歴史に登場します。

中国史上初めての大帝国を統一した秦の始皇帝が、度量衡と同じく帝国内の文字の強制的な統一を実施し、この文字(篆書)でやはり施政方針ともいうべき統一宣言の詔書を石碑に刻ませています。この文字が今日の漢字の祖先です。インド系文字文化圏と漢字文化圏の間には、このような不思議な一致がありますが、その後二つの文字がたどった道はまったく対照的です。

漢字は、中国はもとより伝播した朝鮮や日本においても常に文字としての規範や統一が強く意識される一方、字形は篆書、隸



デリーの街で

書、楷書と簡略化の方向へ変化していきました。それに対しインド系文字は、インド系文字としての規範や統一という求心的な精神は見られず、字形は装飾的な要素を自由に付け加えつつ各地で独特の形を発展させました。漢字文化圏で発達した書道という文字芸術がインド系文字文化圏では見当たらないのは、文字に対するこうした意識の違いに理由があるのかもしれませんが。

ブラーフミーの伝播

ブラーフミー文字は、約3世紀ほど均質な字形を保った後、地方ごとに分化しそれぞれ独自の変化をとげていきます。伝播や時間の経過ばかりでなく諸王朝の分裂と興亡の歴史が、字形の変化に大きな役割を果たしたことに疑いの余地はありません。時間という縦軸と空間という横軸からなるひろがりの中に散在する字形を線で結びつけていくと、一つの文字が、まるで細胞分裂のように分化し変化していくさまがよくわかります。

インド系文字の東南アジアへの伝播は、南インド、東南アジア島嶼部、そして東南アジア大陸部へと向かう海上の道が中心であったと考えられています。東南アジアの初期のインド系文字は、ベトナム中部に栄えたチャンパー王国の碑文に見ることができます。このことから3世紀にはすでにこのルートで東南アジア大陸部に到達していたことがうかがえます。

インドのヒンドゥー教や仏教が東南アジアに伝わったことはよく知られています。こうしたインド文化の伝播は、数々の伝説に彩られていて細部はまだ十分に明らかに

カ	カー	キ	キー	ク	クー	ケ	コー
ka	ka	ki	kī	ku	kū	ke	ko
क	का	कि	की	कु	कू	के	को
𑖕	𑖕𑖜	𑖕𑖞	𑖕𑖞𑖜	𑖕𑖟	𑖕𑖟𑖜	𑖕𑖠	𑖕𑖠𑖜

(図2) インド系文字の「カキクケコ」

- 1) 「カ」をあらわす子音字は、最初から母音 a を含んでいます。したがって、子音 k と母音 a を分離することはできないのはカナ文字の「カ」と同じです。
- 2) 「カ」以外は、「カ」をあらわす子音字の前後左右に一定の記号を付加して「カー、キ、キー、……、コ」とあらわします。この記号を母音記号といいます。子音字が違って、同じ母音をあらわす母音記号の形とそれが子音字に付加される位置は同じです。母音記号が付加した子音字は、子音のみをあらわします。

なっていません。言語学、歴史学、宗教学、文化人類学の総合的な研究とともに、インド系文字字形の体系的な比較研究の成果が待たれます。

インド系文字の共通の特徴

字形は多様でもブラーフミー文字以来一貫して変わらないインド系文字の共通の特徴を見てみましょう。表『インド系文字のカキクケコ』には、1段目から、カナ文字、転写記号、デーヴァナーガリー文字、ブラーフミー文字の順に力行が並んでいます。(参照図2) デーヴァナーガリー文字は現代インド系文字の代表の一つで、ヒンディー語、マラーティー語、ネパール語以外に、古典語であるサンスクリットなどの表記にも使われています。

カナ文字もインド系文字も、子音と母音の組み合わせが字形の単位になることから音節文字とよばれています。5つの音節「カキクケコ」をあらわす場合の経済性を考えてみましょう。カナ文字では、5つの音節に対応する5つの文字を覚えなければいけません。一方インド系文字では、「カ」をあらわす子音字1つと「イウエオ」をあらわす4種類の母音記号の組み合わせで「カキクケコ」があらわせます。これだけだと、カナ文字もインド系文字も覚える字形あるいは記号は合わせて5つです。しかし、これがサ行、タ行、ナ行と増えるにつれてそ

の差はひろがっていきます。カナ文字はいつも5文字ずつ増えていきます。インド系文字は、サ行の子音字「サ」、タ行の子音字「タ」と行が増えるごとにたった1つの子音字を覚えるだけです。母音記号はいつも共通だからです。したがって、子音が m 個、母音が n 個ある場合、カナ文字は $m \times n$ 個、インド系文字は $m + (N-1)$ 個覚えればよいことになります。デーヴァナーガリー文字の場合、 $m = 30$ 、 $n = 10$ ぐらいの数になりますから、カナ文字のように字を作っていくと300個必要になりますが、実際は39個で足りてしまいます。

ハングルを知っている人は、文字の成分の組み合わせ方がよく似ていることに気がつくられるでしょう。ハングルの考案の背景には、インド系文字であるチベット文字から作られたパスパ文字の知識があったと考える人もいます。



ニューデリー市内の道路標識
4つの表記文字と言語
デーヴァナーガリー文字(ヒンディー語)
ローマ字(英語)
グルムキー文字(パンジャービー語)
ベルシャ文字(ウルドゥー語)

日本とインド系文字

日本もインド系文字と無縁ではありません。墓地の卒塔婆に書かれている梵字(悉曇文字)は、仏教とともに中国を経て日本に入ったインド系文字です。7世紀の初頭に伝来したといわれる法隆寺蔵『般若心経』は、インド系文字の現存する世界最古の写本です。系統的な体系として梵字を将来したのは弘法大師空海といわれています。この梵字の配列順が五十音図のもとにもなっています。

おわりに

インド系文字文化圏は、地球の全人口の約4分の1を擁する大文字文化圏です。そしてインド系文字は、多くの子孫が繁栄しているという点では、世界でもっとも幸福な文字のファミリーといえるかもしれません。

インド系文字についてさらに詳しく知りたい方は、インターネット上でアジア・アフリカ研究所の「アジア文字曼陀羅 インド系文字の旅」(<http://www.aa.tufs.ac.jp/i-moji/>)を訪問していただければ幸いです。

まちだ かずひこ

1951年横浜生まれ。東京外国語大学、インドのアラバード大学でヒンディー語を専攻。専門は、インド言語学、文字学、言語情報学。特に文字と人間の歴史や生活の変化の関心に関心が深い。学生時代にはインドの言葉に慣れるためインド映画鑑賞にかなりの時間を費やしたという。現在はアジアの文字資料のデータベース構築をめざすプログラム(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の「GICAS: アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成」)に多忙な毎日である。